



博物館だより

第49号

1999.12.20

Nagano City Museum



(((入館者100万人達成!!)))

平成11年11月14日(日)午後1時過ぎに、100万人目の入館者をお迎えしました。100万人目の方は、家族で来館された新潟県新井市の山崎優樹君(10才)でした。この後、常設展示室入口のくす玉を割って、「入館者100万人達成記念セレモニー」を行い、塚田市長と久保教育長から記念品が贈呈されました。100万人目の優樹君は「100万人目になって、よかった」と感想を述べていました。

思えば昭和56年9月23日、好天に恵まれ長野市立博物館は開館の朝を迎えました。長い準備期間を経て開館までこぎつけた感動は、前日から泊まり込んでの作業疲れも忘れるほどすばらしいものでした。ご来賓やたくさんの方の市民の皆さんを前にして挙行したオープニングセレモニー、それに続

く展示説明、講演会、さらに全館開放で館内を埋めつくした市民の皆さんの笑顔は今も脳裏に焼き付いています。この日に来館された4030人全てが、長野市立博物館来館者1人目でした。

それから18年、この間には43回に及ぶ特別展示・常設展示室の資料の入れ替えなど、学芸員の研究の成果を発表する機会を持つとともに、限られた予算の中から精一杯の工面をして収集した資料の公開など、常に「市民の皆さんとともに新しい長野の文化を創造する」館の目標に向かって進んできました。

そして、100万人目の来館者を開館以来18年2ヵ月目でお迎えできる感激はひとしお

(館長 山口純一)

あかしば

赤柴鉱山今昔

第43回特別展

こがね くろがね

『黄金と鉄—信州の金属鉱山—』より

10月9日(土)から11月23日(木)まで、第43回特別展『黄金と鉄—信州の金属鉱山—』を開催しました。今回の特別展は、地元の身近な金属資源に目を向けることを通して、私たちの豊かな生活を支えている地下資源について理解を深めていただきたいという意図から企画しました。

長野県内にもかつては多数の鉱山があり、つい数十年前までは各地で盛んに採掘されていました。しかし、県内の鉱山は小規模なものが多く、そのほとんどが閉山してしまったために、現在では人々の記憶から忘れ去られようとしています。

例えば、長野市内にも松代町豊栄に赤柴鉱山という銅の鉱山がありました。この鉱山は、戦国時代に武田氏によって開発されたという伝説がありますが、記録が残っているのは江戸時代からです。江戸時代の採掘は延宝年間(1678頃)に松代藩が行ったことに始まり、享保4年(1719)には大坂の山師によって採掘されています。文化2年(1805)には中之条(現坂城町)の住人甚四郎が越前(現在の福井県)の山師を雇って採掘していますが、銅の産出が少なく、わずか2年で廃坑となりました。文政11年(1828)には松代藩が採掘を行い、天保3年(1832)には埴科郡鼠宿(現坂城町)の治郎左衛門に名義変更されています。このときの1年間の産出量は、わずか銅9貫目(約34kg)・

銀26匁(97.5g)にすぎなかったそうです。天保7年(1836)には、佐久中込の山師惣兵衛が松代藩の援助を受けて大規模に採掘していますが、採算がとれず数年で廃坑になっています。なお、松代藩では、天保年間の採掘によって得られた銅を用いて大砲を製造したと伝えられています。その後、松代藩は嘉永2年頃(1849頃)にも大規模な採掘を行っていますが、やはり産出量が少なく、わずか1年で廃坑となっています。

明治以降も赤柴鉱山は山師や資本家によってたびたび採掘されました。特に大正3年(1914)に始まった採掘は規模が大きく、一時は坑夫や雑人夫及びその家族らが250人もいて、飯場や宿舎のほかには商店まであったといわれていますが、5年後に廃坑となりました。その後、第二次大戦中には軍需物資増産のために国の重要鉱山に指定され、国の援助を受けて大規模に採掘されましたが、終戦とともに休止しました。戦後も昭和25年(1950)から採掘が再開されましたが、海外から安価な鉱石が大量に輸入されるようになって採算がとれなくなり、昭和36年(1961)に閉山しました。

現在の赤柴鉱山の跡地には、多数の坑道跡のほか、事務所の建物などが残っており、鉱山が盛んだった頃の面影を کاろうじてとどめています。

(畠山幸司)



▲赤柴鉱山の坑口

明治時代以降の坑道跡です。



▲赤柴鉱山の事務所跡

瓦版「大地震満水の図」の版木見つかる！—善光寺地震—

弘化4年(1847)3月24日におこった善光寺地震については、その様子を伝えるさまざまな瓦版がでまわったことが知られています。今回その内の1枚の版木が見つかりました。消耗品である版木が伝えられることは大変めずらしく、貴重な資料です。所蔵者の堀家には、版木伝来の経過は伝わっていませんが、情報・物流の中継地となる宿場(丹波島)に伝わっている点は興味深い資料です。当時火災や災害、事件など速報的な情報を伝える無届出版の摺り物は「読売」と呼ばれ、人の集まる街頭で売られたといわれています。

以下この瓦版の特徴をあげてみたいと思います。
①被害状況を示す凡例が同種の瓦版に比べて細かいこと。②凡例の「水多通ル」などの表現から、4月13日の犀川決壊後の被害も加えられていること。③上氷鉋村の唯念寺において、犀川の押し水で崩れた塚から源海上人のミイラが現われたと書かれていること。④「久米路橋」・「姥捨山」・「八幡宮」・「戸隠」・「飯縄」など名所情報も加えられていること。⑤被害地名は街道・川中島平・犀川・土尻川沿いを中心に、松代領(131)・幕府領

(25)・上田領(10)・塩崎知行所(8)・松本領(5)・戸隠神領(3)・須坂領(2)・善光寺領(1)・飯山領(1)・椎谷領(1)と広範囲におよぶが、飯山・中野の被害は書かれていないこと。⑥被災地名は行政村としての「村」ばかりでなく、字や小字あざ こあざを示しているものもあることから、地元で摺られた可能性があること。⑦彫りが深いこと、などがあげられます。以上から、この瓦版は災害情報に加えて、販売促進効果をねらったさまざまな要素が加わった手のこんだ瓦版といえ、善光寺地震の瓦版の中でも後出のものと考えられます。

また、版木の裏には嘉永元年(1850)6月4日から14日にかけて上方でおこった大風雨による被害の瓦版も彫られています。こちらは、被害にあった石高をオーバーに表現したり、「作者聞取不案」と情報しんびようせいの信憑性に責任が持てないなどと彫られている点から、速報性を重視した印象を受けます。被災地は離れていますが、翌年におこった災害情報が同じ版木に彫られていることから、この版木は嘉永元年頃に作られた可能性があります。

(降幡浩樹)



▲版 木

版木寸法 縦24.3×横45.6cm 厚さ1.6cm

桂材 所蔵者 堀清巳氏(長野市丹波島)

▲摺 物

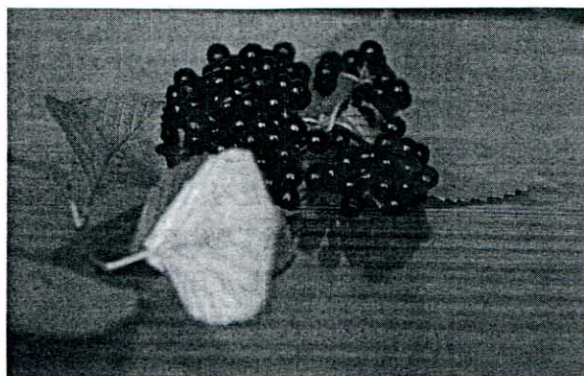
摺物寸法 縦23.4×横44.5cm(上)

茶臼山の秋

今年は気温の高い日がつづいたために、茶臼山の里山は緑の森がうっそうとしています。10月下旬になり、やっとヤマザクラ・ヤマウルシ・ヌルデ・ニシキギなどが赤い色をつけ始めました。

林縁には野菊の仲間のノコンギク・ユウガギク・リュウノウギク・アブラギクがそれぞれ淡紫・白・黄色の花を霜にも負けずに咲かせています。

木の実も色をとりどりにつけ（クリ・コナラ・



▲ミヤマガマズミ

小石の探検隊

10月23日(土)、10月29日(金)、11月5日(金)の3回にわたって、観察会「小石の探検隊」を開催しました。参加人数は15人でした。

今回の観察会は、河原の小石や地層の中の礫の種類を調べることを通じて、自分たちで郷土の大地の過去の姿を解明しようというテーマで企画しました。

第1回と第2回はともに新生代第四紀の初め(約170万年前)の河川で堆積した地層を3カ所で観察し、地層の中の礫を調べて、当時の川がどこの山々から流れてきていたのか、現在長野を流れている千曲川や犀川とどのような関係にあったかなどのことを考えました。その結果、西長野の西河原層と中曽根の水内層の礫はともに美濃帯(北アルプス南部以南の一带)の堆積岩を主としていて、礫種構成がよく似ているのに対し、信更の灰原層の礫は聖山の安山岩が多く、西河原層などとは違う水系であったことがわかりました。このような結

くヌギのドングリ、赤いガマズミの三兄弟、紫色のムラサキシキブ、赤い柄に黒い実のクマノミスギ)野鳥たちが来るのを待っているように感じます。フジやクスのつるには豆果がぶらさがっています。

イチヨウもあまりよい黄葉にはならず落葉をはじめ、ギンナンがさびしく残されています。

化石植物のメタセコイアは緑色がややあせてきて、まもなく黄変して落葉するでしょう。

つい先日までの天気の良い日には、最後のフジウツギの花に旅の途中のアサギマダラが一日中蜜を吸い、長旅に備えて栄養を補っていました。また、タテハチョウの仲間も少ない花に集まりむさぼりつくように冬眠前のエネルギーを貯えています。

例年の今頃はヒヨドリがにぎやかにおしゃべりをしながらやって来るのですが、今年は野鳥の姿が少なく、時々シジュウカラやホオジロを見かけるだけです。

(小林規甫)

果が得られたので、第2回の最後のまとめの際には、当時の長野の古地理がどのようなであったかを自分たちなりに推定することができました。

地質を勉強する一番の面白さは、調査によって誰も見たことがない大昔のことや大地の仕組みを知ることができる点にあると思います。今回は礫層の調査を題材にしましたが、それに限らずに参加者自身が調査を体験できるような観察会を今後も折にふれて企画していきたいと考えています。

(畠山幸司)



▲美麻村 新行 高原で礫層観察 (11月5日)